



14
3157
17



句集叙

明

哉藉不傳也而秀時者以爲之善至其修辭也少
 也激也勿能以理去其大要者自此以意屈指可
 辨辭哉辭也其結核不似熟而標指高玉之極熟
 爲理時也所謂之新亦打去其子其極好時兒也
 子平日者自學或都聖少所之修其法少如以偏
 以之生時之學也者者千節于聖一選生人必學
 道其之新乎千代石少清流晉賜去其其形骸
 標名標流之善也唯道其變其釋也其以自標其
 園而爲宗善道於其月自善原於其澤柳能祀和歌

其深實乎此其惟崇矣每之之句知與不否以無不
 曰某所有若人知如傳以實焉其形謂之形不形
 然而道融膚交於其心子而理者以何何實固不殆
 不多是亦所以和善者將稱利定之而清之辰能曰
 象得之造他字喘之造化字何字之為是也必公
 未若久矣。法以知在終始法地標養得日家年
 其躬自校正之昭曆剖刷民而法。我經未後尼
 必執生風類於且法。法師之心之物以所言別
 之云

庚辰十四年甲申和春

勉強印

南越滕松田撰



(Faint, mostly illegible cursive script, possibly bleed-through or a second draft of the text on the right page.)

四六四

筆も被る裾かひくも又まが鏡に片
花は一一一此う気名にまあああ
一一一いふしつるぬひは一一一人を
鳴何つり人も世及のま流をききい
ふま一一一きけあまも一一一も句かあはあ
りあまあか一一一あ一一一あ一一一あ
ぬのあやまあゆあ一一一あ一一一あ
い一一一あ一一一あ一一一あ一一一あ
あ今志の身わおはるまかゝるすあ

勉強印

一一一もあ一一一蒼のの一一一あ一一一あ
一一一あ一一一あ一一一あ一一一あ
一一一あ一一一あ一一一あ一一一あ
一一一あ一一一あ一一一あ一一一あ
一一一あ一一一あ一一一あ一一一あ
一一一あ一一一あ一一一あ一一一あ
一一一あ一一一あ一一一あ一一一あ
一一一あ一一一あ一一一あ一一一あ
一一一あ一一一あ一一一あ一一一あ
一一一あ一一一あ一一一あ一一一あ
一一一あ一一一あ一一一あ一一一あ
一一一あ一一一あ一一一あ一一一あ

肥後県立中央図書館蔵

加州金陵本他地



Vertical columns of cursive Chinese calligraphy (草书) on the right page, written within a double-line border.

勉强印

毛福康



Vertical columns of cursive Chinese calligraphy (草书) on the left page, written within a double-line border.

の事とあるは、*Handwritten Japanese text*

Handwritten Latin text in a cursive script, possibly a translation or commentary.

勉強印



傳子代女書

Handwritten Japanese text in a vertical column, likely a letter or a record.

Handwritten text in a cursive style, likely a letter or a personal note. The text is written on a page with horizontal lines. The characters are fluid and connected, characteristic of the 'sōsho' style. The text is oriented vertically on the page.

地強印



Handwritten text in a cursive style, similar to the text on the opposite page. It is written on a page with horizontal lines. The characters are fluid and connected. The text is oriented vertically on the page.

地強印

對のゆゑの代

ま

玉の名はまきうまひ

とゆよの歌いおあまじう

うらひもくは信の節を起す

ねの唐をあらぬ

あま持りけちの門を

こまの人のくまを

こまの人のくまを

えと大脚

打とるあまを

牡丹のさるいなるの

帰るあまをあらぬ

ねも清くよみの

あまのの

あまのの

あまのの

あまのの

あまのの

あまのの

浄月の夜りや春の夢をゆり

ふ代中の海みち

船倉水の

ふゆの

いづれも

あはれ

いづれも

いづれも

いづれも

いづれも

春の

春の

春の

勉強印

ふ代尼句集 乾

歳旦

福らや塵々今朝のうらみ

よけ事の目よもあやもや花の春

初空や鳥はよ野、のふり

我裾の鳥も遊ぶやこころ

かこぬ初音も来より 度竹

松竹や世にのらむ日の始

竹も起て音吹る吹初日哉

福やも清所の裾にも袂ぬる

勉強印

鶴のちまきを雲井にうれは初日哉

布袋の賛

初空や袋も山の笑ひより

初霞

顔の空へ収むる初霞

水のしらぬ盟の事とけつ霞

地に遊ぶ鳥も鳥ふり初かき

初うき人さうみや二見のわりを

若菜水

若水や流るる去年

若水や藻の味花も此年

若菜の影

若菜の影

若菜の影

若菜の影

若菜の影

若菜の影

若菜の影

若菜の影

若菜摘くより花の道廣く
七草のひきまきある水の音
仕事おひ暮るおひ暮る
手の跡を雪のうらむる若菜
花のうらむる出惜しむ足と若菜
しと家も摘み出す雪の若菜哉
七草や翌うらむ目の地よほつ寸
七草やあまのわとまきぬの
一いふのあまのわと白く若菜哉
七草や都の文を見む日數

ふくむと我ら脊戸みよる盡
風の手にくるも入ぬ若菜哉
七草や雪を拂つた若菜
白い手や馬追もあり若菜畑
山彦ちうまの事ありわつる摘
鶴の画賛
入音は鶴もさき若菜
梅
梅咲や何う降るも春を
梅の香や風のあひく木よ

梅の花咲目を木より葉あり
 ひきうや石もうむ出に雪間より
 梅うや戸の開音ちみほくはと
 咲事し月を撰いすや梅の花
 梅うや尋ぬるむら枝にさへ
 梅の香や馬を寝さるるよと
 文臺のうら書
 梅の月浪のうら二見の程
 梅の香やとより月夜の面白く
 梅うや谷へむらよ行戻か

勉強印

手折るる人より童らや梅の花
 追悼
 梅らるるの夕邊も秋の聲
 梅花に伸手向
 むらり散りし見す梅の花
 梅うや朝におる花の陰
 梅咲や水と人水たあめ水
 梅うや河處へ吹く雪女
 大黒の繪賛

勉強印

有手うてくくるる初はつのは梅うめの花

繪え賛さんくく章あきら風かぜくく心こころ風かぜ雪ゆきのの花

梅うめのの香かほくくくくくくくくくく梅うめの花

梅うめのの花はなはは月つきささくく寒さむい

鶴つるのの河かのの花はなはは梅うめの花

鶯うぐいすのの聲こゑはは又また言いひひままのの初はつ音ねのの聲こゑ

鶯うぐいすのの聲こゑはは初はつ音ねのの聲こゑ

黄鳥きんりょうのの聲こゑはは初はつ音ねのの聲こゑ

黄鳥きんりょうのの聲こゑはは初はつ音ねのの聲こゑ

都みやこのの竹たけのの奥おく

鶯うぐいすのの聲こゑはは野ののの沙さ汰たのの氣きははつつるる

鶯うぐいすのの聲こゑはは初はつ音ねのの聲こゑ

鶯うぐいすのの聲こゑはは初はつ音ねのの聲こゑ

鶯うぐいすのの聲こゑはは初はつ音ねのの聲こゑ

黄鳥きんりょうのの聲こゑはは初はつ音ねのの聲こゑ

黄鳥きんりょうのの聲こゑはは初はつ音ねのの聲こゑ

柳やなぎのの聲こゑはは初はつ音ねのの聲こゑ

柳やなぎのの聲こゑはは初はつ音ねのの聲こゑ

柳やなぎのの聲こゑはは初はつ音ねのの聲こゑ

青柳あおやなぎのの聲こゑはは初はつ音ねのの聲こゑ

うしろすく起やとほる柳の葉
青柳を何處に植る静なり
結ちつと解つて風の柳を
ふらふら又根にうくる柳の葉
青柳をとうらの世話し水の音
柳の残りも動く水に流る
おそろし根を恥入る柳の葉
手折らぬ花を見らぬ柳の葉
根を置かずかきもぬ柳の葉
恵比壽の賛

釣竿の糸吹を巻く柳の葉
百とあがり客一眠を柳の葉
素石のまじりまじり柳の葉
見らぬらに霞をよめる霞うた
青柳の朝寝をよめる霞うた
春雨
もよよ草何々を春の雨
春雨やうらやうら物ほら

春雨や土の笑も野に餘り
まじりぬる水も青うり

蝶

蝶は何をも夢見も羽はら
夢ふも蝶も手折や花戻り
蝶折る扇も出さる霞うり
まじりぬるや折るも蝶の夢
蝶はやまをこの道の跡や先
わつ風も我吹おとす胡蝶うり

蝶はや裾も居る位山

五百年の法會も蝶の法
の場

猫窓 淡雪

聲たぬの時わを猫の窓
ふりぬる雪にわを猫の窓
淡雪や幾筋も道の

風巾 霞 山吹

吹くも花を欲も風の中
馬を音に跡先も霞をか

山吹や柳に山のよもひをさるる
山吹のよもひをさるる水の幅

徳政五百年ゆき法會二章

ふさふさ合ふやうにわらうるや淵も瀬も
すまゝのやに流わすのうら増りきり

櫻

あけちと男うらむわ 初櫻

初ふあやかりの松竹を冬の厳

明日のつゆは成る朝日づれ

とら見んと花に狂ふよしの山

まよ來すは人のあまよう 初櫻

唯ふのこゝろあまむま 初櫻

見よ房の人あま逢は初櫻

ひもいれ蝶も昼寐やあま

明の夜にいふや白 初櫻

影も瀧空の花ありいとさめ

月の夜の栞も蝶の朝寝

何はよめも端の青山

清くも刺れやも山

晚鐘を空にまよふ

短冊を風をあつらふはつらら
花の櫻をうらみの雲は消すはつら
見入人も危相れありや初ゆら
り入りの日脚や山をこら
花ありや人の嵐を昼をうら
ふまをこら来り誠之初ゆら
女もこら押すのつら山を
見ぬものをえんや嬉しはつら
うら外を馬の仕事や神のま

奉納

五贊

草の蝶も寝るも花見は
富士の笑ひ日み高き桃の花
それやたのしみ道やもこのを
よの世うら馬も戻りや桃の花
桃咲やよのめあつた捨てるは
里の子の肌を白くもこのを
桃咲や幾度馬より行つた
隠れ家の色は出に名を桃の花

も、嘆くわ 名は何とわらふ所
富士身はまある人
楓の色目よおとるうら 富士見
戸の開くあねと留守く 楓の花
汐干
青柳のうよは短よすか干うれ
捨よりのいれおくこ 汐干瀉
海士の子に物づくせき 置汐干
蝶このはきりくくある 走る干
雛

雛のちや雛のちも恋しらす
轉はるるあきくはあにれあ
とる 灯の用意や雛の臺所
朧月
穴の明松風もあ 朧月
あきら夜やをわらうあき人
拂ふ事 ねもふあす 朧月
朧夜や見届くもの梅をとりわ
お月夜や 松の子とわらう
言はるる見直す人や朧月

朧夜やうらぬ歌へ行過り
世の卷を丸うつむら朧月
朝雛の子
若草や尾の影うらぬ雛子の殻
耳遠い事うらぬうらぬのこゝろ
隠すも事うらぬうらぬの聲
雲雀
ゆづりうらぬ夜に入るる雲雀
折りうらぬ雲のうらぬうらぬ

勉強印

てうらぬ寝るもまおれぬ雲雀
草むすの留守に風や雲雀
あゝうらぬ下を見うらぬうらぬ
ある折うらぬうらぬ落る雲雀

無賛

身のうらぬや雲雀の籠も地は置す

燕

乙鳥来うらぬうらぬや舟の脚
舎りうらぬうらぬうらぬの燕うらぬ

雨蛙

勉強印

雨雲ははらのうへに蛙うね

鳴雲花呼戻りて蛙

踏つて雲をうへに蛙

養生濱より

蛙鳴るは養生濱

若州 血替

若くは駒の寐起も

送る

若くは也歸り路を

認め五百年

地も雲に染らぬ

駈出ぬ駒も足嗅

松花

吹つる塵出る

あゝとるよ

二ひのつる月

隠居を

囀る世にや

閑まは河の心

下蒔や水仙

見送れに墨跡に残り
 藤の花
 藤の花をよめる連に
 驚の敷もさるや藤の花
 ねらふも小聲よらふや
 地を願はば
 願はば

勉強印

花の香より見せしや更衣
 蝶はかきかへて夜著の
 朝よ
 脱捨の山につもるや更衣
 冬にぬるぬるの皺をぬるは
 二日三日身の添ふの裕也
 銀

勉強印

日はあけ 卯月の空もきよみふく

卯花

うの花も目とみらあき墨かたわ

卯の蒼や垣の結目も降き

うのささみの開よ手のつく若葉の

牡丹

垣の隣の隣あるる牡丹の

水に添りあき名もあき白牡丹

蝶の夫婦寐あまのうんわ

指折きぬ翌もわら牡丹の

おの通姫の替はせき 精進き
ゆらうあに 蛸も影も牡丹の

杜若

水の清しうの杜若

萍の身はかりおと 杜若

初春の水そのあきや 杜若

雲のゆるいそねとて 杜若

濯佛

濯佛や 葛の若葉かあかみ

蚊帳つりの草もさけさやの御堂

若葉

晚鐘に帯もささの若葉ふゆ

日の脚の道つくりの茂りや

葉櫻や知らぬささのものがよ成

若行い子

ひびく聲はあしき行い子

諫鼓馬

淋りたる雨の音かきこえり

分入は風とさささささ諫鼓馬

箏

竹の子やさの月のうちをささり立

若竹と成り千里も遠くは

風毎に葉を吹ぬささや今年竹

若竹の風を月にくささささ

わさささの音の耳よ這入の町

若竹の風を月にくささささ

そのわかれ浮草の花もささ

郭公

郭公

鶏の聲より 耳やほろろ
りや音水に入る夜やあそび
あすも夜も寐あけよれよ蜀魂
音をいふ山雲井てひもわ郭公
起あがる鳥もあそびよ子規
本々の園植るも立れ杜宇
そよよに残りし聲や蜀魂

子規ののあそびに
男とくまのものを可鳥
唯置る枕の塵や杜鵑
子規の口もとらふ
百合
姫百合のあそびとあそび向
ひあそびや姿見もとらふ子共

水香の水はもろくも水難か

螢の聲はもろくも螢の聲は

下園に居りてもれもや飛螢

その聲はもろくも螢をよ忘れ

田はもろくもはもろくも螢は

淡

花と針の心問ふ事淡くも

草蒲の心問ふ事淡くも

降と比してもろくも名のある草蒲

音はうり筈失ふあやめ

澤にあるうらな名をみの草蒲

風よりの常のものそ軒草蒲

五月雨

短夜のうらなももろくも五月雨

田植

神のむねをいぬもあま田植

汗はよりの疏くもと田植

田入の唄あたま有る道す

くももろくも男をほろくも田植

早乙女わやれつる連も有

早夕顔

ゆわく朝も朝ももるさうり

夕顔や女子の肌の見ゆさ

揺めうかや物のうねるさうり

りふふの宿や茶の香も水くさよ

紅花

あつちる折もさるの紅島

涼風の這入る見よの紅島

あかぬさる唯のほる紅の露

短夜のほる花や紅島

山陰やあもとの日や紅の花

あつちる空にさるの暑さ

塩竈のりよ五日とあつちる

晚鐘に散り残りさる暑さ

来て見れぬ森にさる暑さ

あつちる藻の花

うねるさる蝶の力の押さる

蕨を岸に繋ぐ糸の系

浮草よ我を根の付ゆさ

薄やとりぬとすくも笑ふ河
藻の花やゆれすれおぼなるは行

氷室

涼しきや氷室の帯しより

蓋とりてつゝあつたふのさや水鏡

蝉

初蟬や風も用のある日

せんの音やかたはそれ松に有ら

松風もをらふゆりて蟬のこゑ

山納涼

松の葉もよふてくわくと涼スなり

涼しきや稍く風の吹あまり

涼風を押し合はる草とくまの

すくもて手は届くねと松のこゑ

涼風もやあつたと出づる鷺の首

影坊の森くはくも涼し

唐崎の雀も涼しき寒

道

道もその道に叶ふものす

涼しきも恥く程行廣り

八十の笈

涼しやわこころ八十の路の松の夢

子の子の賛

子の間よ雞も迷ふやゆの涼

涼風の植

涼風の植とるるを住居

伊吹の人よ

あはらうちとちとの風とまじけの

白雨

ゆるゆる道よりとけりな和山

夕立や平爾を雲の

雲峯

眼よまをる鳥は消るの雲の峯

松風を植とるるを雲の峯

源よまをる鳥は消るの雲の峯

河里を我目のまをる雲の

平清の水を

山のを野の裾を清水

青りくを

勢の勢よ

道くきぬ手のうつくしき清水くる
 紅くは口のわすれ清水は
 けさきく又我も逢ふ清水は
 手あふれけむらのきき清水は
 近道をまよふ日のまの清水は
 月よむらふ谷間をの清水は
 初めはくは清水は
 初くはくは清水は
 清水はくは清水は

千代に真如平等
 清水はくは表も表もあつた
 夏の月
 釣竿のまよふなるや夏の月
 秋の音の我もあつた今朝の秋
 秋の音の我もあつた今朝の秋
 初秋の音の我もあつた今朝の秋
 初秋の音の我もあつた今朝の秋

通とて手の上より清くする
如くは口より清くする
竹を吹く入我とて清くする
手を取りて清くする
血道を走る清くする
舟を渡る清くする
山を登る清くする
海を渡る清くする
空を飛ぶ清くする
大地を踏む清くする
万物を生む清くする
万物を養ふ清くする
万物を治む清くする
万物を成す清くする

千代巨句集出坤

又月初秋
又月月初秋
又月月初秋
又月月初秋
又月月初秋
又月月初秋
又月月初秋
又月月初秋
又月月初秋
又月月初秋
又月月初秋
又月月初秋
又月月初秋
又月月初秋
又月月初秋

吹帳の浪ふよつち朝の秋

秋ころもきつる。有の終

清くする。初め今朝の秋

萩の葉のよりの今朝の秋

琴の音の我よりの今朝の秋

秋をへやは。萬のあらら向

初秋や。水の音

初秋や。庭の音

秋立つや風疾くはもゆりあり
ひびくしの襟よいくさうし 萩の音

残暑

萩の聲ののこる暑さを隙く居り
秋の部へこる暑はる暑さゆり
朝の間にやうつる残暑ゆり
はらうのあきらみ 萩の音
文月や空にまよひ 萩の音
文月の返しん落し一葉ゆり

千六十七夕

勉強印

萩も穂よ出のや星の遊ひよの

初る春やとろろり雲の脚

うさぎのつららの橋あそび

朝えしや星のつららとあちらむ

夕霧も居るやとろろり星祭

本十遠や月入まきい何の影

鶴とけりしき苦の八月哉

朝顔

牽牛花やかき灯火の影あり

あやぐりや鳴所替つそりあり

勉強印

朝顔や起しつゝの日は花もかきす
朝顔を蜘蛛のつゝも咲きけり
薺の花や木陰のひさるゝよ
あつはちを日逢ふ草のひかり
牽牛花のひかり蔓うと葛よ咲き
あつはち誠の花の人きくを
わうほや裾を日もし草のむす
あつはちや草臥直の夜は持す
朝顔や夏の夜はむす夏の内
釣瓶に釣瓶にむすむすはね

草 稻妻

あつはち鴨のつゝはつをむす
稲妻やつゝはつをむす
あつはちの裾をむすはつの上
草の花はむすはつの上
蝶の身の上はむすはつの上
千は画賛三三章
芦間うゝ風の拾はや捨小舟
あつはちの裾をむすはつの上
あつはちの裾をむすはつの上

よしあすの穂に頭いれし二月川
子種貝の殻に
波の上は秋の吹くあり子種貝

道子三章

日和の道は薄の帯あり
下冷を吹手あそび道草
史まはるは月のもふさねの玉置川
いよ見ても春敷種草の毛
秋風のつらさるる尾流うら
草の戸やまはすれさむも吹く

無賛

知子のつまづくはる薄の
鳴鐘はとらふそむ尾流いり
栞板のむ吹く寸言を
川音の晝ちしむるも
千枝と吹手むすしそ草の履
秋の聖やもとる草の葉
のうらむるそりそ石燈の
鶏頭やもそりそ干有

鶯野やまのけりい根に遊遊
刺髪の人
産と世を露もつねを宿のま

十折風出

本うらまのあはる多やねの夜

行水んどのの鶯かのらん車川

虫の音にらも重ん降る根川

脱袴の管もろもろやさうくす

虫の音や望にゆきまのりる夜への

草良夜

名月や人た押合ふ鳥の鶯たか

名月や雪更にはるの音

名月や行ももくよねの夜

名月や鳥うの森いうはかり

名月や鳥ももも似すねの音

名月や鳥はまももを安ん

名月や鳥はまももを安ん

名月や鳥はまももを安ん

名月や鳥はまももを安ん

名月や鳥はまももを安ん

何恙ともなくくくくくくくくくくく
名月や鳥も寝くらの戸をゆき
月見も誰りくくくく女子達
名月や園を尋ねるも有
月の夜や石におく啼くきくくく
人中を潜り欲する月見ゆ
名月の舟やあそびもくくく
舟をなすりくくくくくくくく
名月やあそびもくくくくく
ゆきやゆきやゆきや富士の裾

名月や宿の丸を丸くく
くら町の軒あそびもくくく
名月や唐崎の園あそびもく
あそびもくくくくくくく
くくくくくくくくくく
名月や雲の裏もくくく
石山無替くくくくく
名月や雲の裏もくくくく石の音
十六夜
くくくくくくくくくくく

十六夜や嘆く人のうらみあり
いよしの言果めりち
十六夜の暮きや早の露
いよしの園や秋の人も有

初雁

初雁やあつちのゆくは
はつ唐口山くはなぬ
初雁やあつちのゆくは
しらべや見捨れぬを
しらべや見捨れぬを

鶉

鶉の目の色は
賣りかゝるは
鶉の目の色は
鶉の目の色は

菊

菊の香に遊ぶ日は
菊の香に遊ぶ日は
菊の香に遊ぶ日は
菊の香に遊ぶ日は
菊の香に遊ぶ日は

菊咲く 露の香はまにまに
白菊や ぬきつゝ 手のむくき
菊咲く 今よかきく 世話や
まき 細や 木のけきは 雲井かき
菊の香や 葉に 押さ 吐日よめ
朝の露よも けす 菊の香
菊畑や 夢は 不む 八日の
今よは けり 身す むもの 菊の香
白菊や 雲い といふも けり
今よ ぬき 草臥 けり 菊畑

今よの菊や 独咲く 今よの菊
今よの菊や 目に 咲く 今よの菊
今よの菊や 心に 盛る 今よの菊
後月
新坊 今よの菊 今よの菊
今よの菊や 細も 踏む 今よの菊
今よの菊や 始む 今よの菊
今よの菊や 残す 今よの菊
今よの菊や すす 今よの菊
山彦 今よの菊 今よの菊

瓢

又形の身いもちりけり 枯の形

三

百生や蔓一ふらふのこゝろあは

約束をりけり 枝や種ふけり

一瓢

九十九とよそにわさる 瓢うら

花や葉に 瓢うら 種もや

新枝の、葉も出さぬ 瓢うら

紅葉

木陰うら出さぬ日の暮る 瓢うら

田わたりと葉はけり 瓢うら

わさるい葉もみちあはる 瓢うら

色にぬる竹も枝の葉も 瓢うら

瓢

葉の葉もみちあはる 瓢うら

鹿

水の香もみちあはる 鹿のこゝろ

冬もれとみちあはる 鹿のこゝろ

独り 瓢うら

秋

音添少きるむらさきの

山子

冬所の槐さしむらさき

風の日も奈所の仕事しむらさき

鳴

鳴く竹やよその

まき

百と所のさゆりも鳴のゆりも有

暮秋

地強印

ゆり竹やよその

時代の

浪泉の山竹の夕都のよ所の

竹林やよその身もは

時雨

ゆりさよその

柳の葉

日の御は

その中に

水鳥の

地強印

枯 寒山の贊

隣 玉のつらみのもの心 落葉川

冬 枯 根 野

冬 枯 や 野 牡丹のあきまり

野 枯 野

野 枯 野

野 枯 野

野 枯 野

野 枯 野

野 枯 野

勉強印

安ん

どもか

大根 野

道

降

手

風 六月

風 や

紙

紙

竹馬も雪も茶の御新川

雪の跡も雪の跡の御新川

雪と跡も雪の跡の御新川

冬馬の馬の御新川

あはれまの御新川

三つあつあつにゆく御新川

池の雪も御新川

花も雪も御新川

ゆくたぐはあはれまの御新川

山馬の口におわさる御新川

勉強印

柳の雪も雪の御新川

馬駒も雪の御新川

霜 霜の御新川

夏の花の御新川

水にゆく水の御新川

朝の日の御新川

初水も御新川

水江の雪も御新川

お江は雪も御新川

水江は雪も御新川

勉強印

冬 梅

冬の梅咲やむらさきのあけまりの
初雪の日のあけ跡や雪のむら

雪

初雪や東のちの葉のむらさ
初雪の鶉の色のねむりと
初雪やむらさきの詞もむらさ
初雪の麦のむらさきとむら
初雪の初雪のむらさきとむら

初雪の初雪のむらさきとむら

初雪の初雪のむらさきとむら

初雪の初雪のむらさきとむら

初雪の初雪のむらさきとむら

初雪の初雪のむらさきとむら

初雪の初雪のむらさきとむら

初雪の初雪のむらさきとむら

初雪の初雪のむらさきとむら

初雪の初雪のむらさきとむら

初雪の初雪のむらさきとむら

青まき葉は目にしる月ころあや木一の雪
花とあり常とあふむけ朝の雪
雪の有ものにはさうすも松のこゝろ
所々をた目の外にあり冬きの雪
手とくちしつわさうさうかたの雪
百あふす葉にあふり冬きの雪
山考よりわきありや鉢ききき
鉢叩

鉢ききき後あはれ巾を起さる
臘ハ
臘ハヤ流し水も物言はぬ
株拂 鉢花
冬きのりの背言さるや株拂
散るもをたむいなり 鉢の花
歳暮
行々やとさうあふもの水斗
同月のそのあも見事すくすくえられ
朝起さるるに年にくれん雪

行舟の速くしるまのいふと何
 舟の尾や柳は春の結ぶ所
 舟の年やまきまのまはれは
 舟の舟の舟の舟の舟の舟
 舟の舟の舟の舟の舟の舟
 舟の舟の舟の舟の舟の舟
 舟の舟の舟の舟の舟の舟
 舟の舟の舟の舟の舟の舟
 舟の舟の舟の舟の舟の舟
 舟の舟の舟の舟の舟の舟

勉強印

本日病書と云ふはちね
 秋初てと代尾句集秋魚の鉦倉とあり
 秋の調子と云ふは
 秋の調子と云ふは
 秋の調子と云ふは
 秋の調子と云ふは
 秋の調子と云ふは
 秋の調子と云ふは
 秋の調子と云ふは
 秋の調子と云ふは
 秋の調子と云ふは

百石

